

河野 栄子氏

リクルート 特別顧問

#121



紹介者



鈴木正一郎氏
王子製紙取締役会長

4月。夫と二人外出した。行き先は孫が入園する予定の朝霞市の保育園。娘が仕事で迎えにいけない際の「代替」となる可能性に下見と相成った。

新しく開園するこの保育園は「どろんこ保育園」とも呼ばれ、農作業や地域交流のプログラムを擁し『いきるちからをそだてる』がモットーだ。娘いわく、「どこでもある同じようなカリキュラムではない新しさがあった」ことで選んだ

という。事実、当日も大量の土が運ばれ、開園の仕上げに暇がなかった。「リクルートの河野さんでいらっしやいますか」

突然背後から声がかかった。30過ぎの若い男性が立っている。聞けば保育園の責任者とのこと。元リクルートの社員で、孫のプロフィールを見た際に、もしや、と思ったという。社外の方から「本当にリクルート出身者は多い。どこにもいる」と言われるが、彼が今の仕事を選じた理由を聞いた。リクルートは早くから男女区別のない職場だったものの、自分も子供が出来、女性が仕事をしながら育児をする毎日がいかに大変かを実感。自分自身の子育てへの関わりを意識したことが機会となった。

私の子育て時代、PTAには必ず参加しよう決めていたが、そこは専業主婦だけの一般社会からは隔離した観のある特別な世界だった。職場に戻り私はいつも言っていた。「仕事を切り上げてでも男性は学校に行くべきだ。子育てや教育に社会の風を送り込めるのは皆さんです」と。

2005年、経済同友会が提言した「個人の生活視点から少子化問題を考える」のデータを見てみよう。

『家事や育児は夫婦で対等に分担すべきだ』に、40年代生まれの積極肯定派が16%であるにもかかわらず80年代生まれは38.7%。

『男性が育児休暇をとることが当たり前な社会になるべきだ』の肯定派に至っては40年代生まれが17.1%、80年代生まれは45.6%という意識乖離がある。

ふと、気づけば開園準備に精を出す若い男性はリクルートのOBの彼だけではなかった。数人の保育士の姿をみながら、進んでいく多様な価値観の存在をそこにみた春であった。

春に感じた多様化

次回

米澤健一郎氏

(フニール学園理事長)
にご登場いただきます。